

近代東京の名所体験：名所図会・案内本の 分析を中心として

KOMEIE, Shinobu / 米家, 志乃布

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

86

(開始ページ / Start Page)

41

(終了ページ / End Page)

53

(発行年 / Year)

2023-03-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00026715>

近代東京の名所体験

— 名所図会・案内本の分析を中心として —

米 家 志乃布

概 要

本研究では、江戸東京の代表的な名所図会および案内本に記載された名所とその分布傾向を比較し、各史料の違いを明確にしたうえで、近代東京における人々の名所体験を論じることを目的とした。その際、東京における行政区画、山の手と下町という地形的特徴、近代交通網の整備・発展という観点から、名所体験と東京の地域性との関係について分析・考察した。その結果、近代東京における人々の名所体験は、明治・大正・昭和を経て、より高密度に、より広範囲に展開し、名所風景の近代化という側面だけでなく、名所体験として多様化したことを論じることができた。

キーワード：名所体験、名所図会、案内本、地域性、近代東京

はじめに

名所とは古くは「なごころ」と読み、その名がよく知られている場所のことをいう。「歌詠みは居ながら名所を知る」という言葉があるように、人々は、歌枕を通して名所の風景を心のなかに共有した。歌枕とは、和歌に詠まれる地名のことであり、その場所には特定のイメージが定着していた。吉野といえば桜の名所、龍田川といえば紅葉の名所、武蔵野や富士も歌枕により広まった名所である（並木 2011・米家 2022b）。

まだ旅がそれほど一般に普及していない社会では、和歌に詠まれたこれらの名所は、あくまで人々の心のなかにある風景であり、場所のイメージであった。しかし、江戸時代以降、旅が一般民衆にも普及してくるようになると、これまでテキストのなかにイメージとしてあった名所から、実際に訪れる場所としての名所へと変化する（並木 2011）。名所を文章と挿絵の両方で紹介する「名所図会」は、実在の風景としての名所を把握し、

そこに実際に訪れたい人々にとっての重要なアイテムとして普及した（鈴木 2001）。

明治以降も名所図会は刊行された。江戸時代からの名所図会の様式を受け継ぐ地誌・事典型のものと観光ガイドブックの前身ともいべき小型・携帯用のものがあつた。人々はそれらに紹介された詳細な名所に関する情報から、実際の名所めぐりを楽しんだ。大正年間になると、このような名所めぐりは大衆観光へと発展する。そのなかで、名所図会も、より観光に特化したかたちの小型の案内本が主流となり、日本社会に普及した（米家 2022b）。

このような江戸時代から戦前までに出版された名所図会や案内本に関する研究は、文学や文献史学、観光学など様々な分野で研究されてきた。主な研究動向を挙げれば、第一に名所図会としての作品の系譜やその書誌情報に注目した研究（市古ほか 1997、齊藤 2013）、第二に文章や挿絵などの記載内容や表象を分析した研究（川田 1990、千葉 2001、米家 2020、小林 2022）、第三に名所図会や案内本を観光ガイドブック研究の一環に位置付

け、掲載された名所が選定される基準やその価値変遷を解明した研究（羽生ほか2003、森田ほか2003、馬木2004、高槻2004など）である。いずれにしても、名所図会や案内本というテキストそのものの分析が中心だった。

一方、人文地理学的な名所研究においては、大きく二つの流れがある。ひとつは、名所の比定やGISによる分析といった名所をめぐる行動文化や空間的特徴の解明である（金子1995、塚本2006）。もうひとつは、作者も含めた当時の人々の名所観や風景観、名所をめぐる場所認識および空間表象に関わる研究である（長谷川2010、阿部2018）。いずれも、過去の歴史空間と名所との関係に研究の重点が置かれているといえよう。これらの研究では、名所をテキストのなかのイメージとしてだけでなく、現実に存在する地理的な「場」として捉える傾向が強く、そこに人文地理学的研究としての特徴がある。

本稿では、近代東京の名所を事例とする。この場合も、名所はテキストにおけるイメージとしてだけでなく、実際に人々が訪れる場所として捉える。明治政府により、第1回から第3回の内国勲業博覧会が上野で開催され、博覧会を契機に、全国の人々が東京を訪れるようになった。東京名所の案内本の多くは、博覧会開催に合わせて刊行された（森田ほか2003）。初めての東京滞在において、地方から東京を訪れる人々が、効率よく名所めぐりを行うためのガイドブックとしての役割があった。

本稿では、まず、東京の名所図会および案内本に掲載されている名所と施設の分布、その変遷をおさえる。従来の名所研究では、名所図会と案内本は、江戸から東京への名所の成立・変遷の流れをおさえるうえで、同種の史料として扱われていた（羽生2005）。前述のように、名所は、テキストのなかのイメージから、実際に訪れる場所へと変化した。名所図会と案内本では、取り扱う名所の種類そのものに差異があることが予想される。本稿では、それぞれの史料にみる名所分布の全体像を比較することで、その違いを明確にする。

次に、これらの分析をもとに、近代東京における名所体験の変化を論じる。その際、江戸東京名所の分布変化に影響を及ぼす三つの観点から、東京の地域性との関係を考えてみたい。東京の地域性とは、東京の首都性などの議論ではなく、あくまで東京という「場」としての地理的空間の特徴を言う。

第一に行政区画である。東京の前身である江戸では「朱引」によって江戸市中の範囲が確定されていた。東京になると、近代的な行政制度が確立する。1878（明治11）年の三新法制定により東京府15区6郡が成立し、1889（明治22）年には東京市15区となった。これにより、人々には東京市内とそれ以外（市引外）という境界認識が生まれた。多くの東京名所図会においても、各区ごとに名所の記述はまとめられた。

第二に東京の空間を特徴づける「山の手」と「下町」という地域区分である。東京は、台地と低地という際立った地形条件に規定される。山の手は谷を刻んだ坂が多かった。また、江戸の名所絵に多く描かれてきたように、隅田川や江戸湾、江戸城に張り巡らされた濠など、江戸には水辺空間が目立つ。江戸の水辺環境は、明治東京にも引き継がれた。「山の手」と「下町」というそれぞれの「場」における名所認識や名所体験の差異も重要である。

第三に近代的な交通手段への変化と交通網の整備・拡大である。江戸の名所めぐりは徒歩での移動であった。しかし、明治の東京では、路面電車や鉄道での移動が中心となり、昭和期には乗合自動車（バス）も普及する。このような交通手段の変化や交通網の整備は、名所体験に大きな影響を及ぼす。

拙稿において、江戸の風景に上書きされるモダンな東京風景として、路面電車や近代橋梁などの交通インフラに注目する必要を述べた。その際、主に名所図会の挿絵や写真における風景表象について論じた（米家2022a・2022b）。本稿では、その論点を踏まえ、近代的な交通インフラ整備と名所体験との関係およびその変容も考察していきたい。

表1 研究対象の名所図会・案内本

史料	刊行年	書名	著者・編者	挿絵/写真	版元/出版社	冊数	名所・施設数
名所図会	1834-1836	江戸名所図会	斎藤月岑	挿絵784	須原屋茂兵衛	7巻20冊	1259
	1896-1909	新撰東京名所図会	山下重民・坪川辰雄・大田才次郎・橋本繁ほか	挿絵357/写真875/江戸名所図会432	東陽堂	64冊	区部3073公園263
	1910-1911	東京近郊名所図会				17冊	近郊715
案内本	1907	東京遊覧案内	東京市役所	写真50	東京市役所	1冊 (312頁)	566
	1937	大東京案内	東京市役所	挿絵1/写真60	東京市役所	1冊 (84頁)	664

I 名所図会と案内本

研究対象の史料を表1にまとめた。江戸の代表的な名所図会として『江戸名所図会』が挙げられる。1834（天保5）年から1836（天保7）年にかけて刊行された。斎藤幸雄・幸孝・幸成の親子3代で編纂された名所図会であり、寺院・神社・旧跡や橋・坂などの由来や故事を説明し、当時の江戸および江戸近郊の名所を詳述した。挿絵は長谷川雪旦である。

明治期から大正期を代表する名所図会として、『風俗画報』別冊の「新撰東京名所図会」と「東京近郊名所図会」を選定した。本史料は、江戸名所図会を超える精確な名所図会を目指し、江戸の「旧観」と東京の「新景」を記述することを目的とする。編纂の中心となったのは、山下重民（1857～1942）である。大蔵省官房第一課に勤務していたが、日中は大蔵省で働き、夕方から夜にかけて東陽堂で編集に従事した。『新撰東京名所図会』の調査は日曜日の仕事であったという。その他、坪川辰雄、大田才次郎、橋本繁らも担当した（米家2020）。

明治期を代表する案内本として、『東京遊覧案内』を選定した。1907（明治40）年に東京市役所市史編纂掛が作成した小型の携帯用の案内本である。東京遊覧のための交通や宿泊、東京名所観光のポイントなどを述べたのちに、東京市15区および郊外における観光名所を案内する。編纂目的は、同年開催の第3回東京勧業博覧会訪問の機会に、各地方より上京する人々のために、東京市内およびその近郊の遊覧のためとされた。

昭和期を代表する案内本として『大東京案内』を選定した（表1）。東京市役所内に設置された「東京市設案内所」による東京を訪れた人々のための携帯用の案内本である。編纂の目的として、「世界第二の都市となった東京を誰でも一度は見物したいであろう、東京を訪れた人々が最も安易に正確に、東京名所の見物ができるように」と記載されている。東京市設案内所は、東京見物全般の案内や宿泊・買物、東京市の業務案内、学校や産業などの問い合わせなど、東京市を観光・業務で訪れる人々のための機関である。取り扱いはすべて無料、日曜祭日も業務を行い、東京駅と上野駅にも出張所があった。

1932（昭和7）年、東京市は市域を拡張して、東京市35区となった。案内本のタイトルにある「大東京」は、東京市35区のことを指す。以後、東京案内本は『『大東京』案内』として版を重ねる。国会図書館の目録によれば1933年、1936年、1940年、1941年、1942年の刊行本が確認できるが、本書1937年版はその目録にはない。1942年まで小改訂を続けており、本書は戦時下突入前の最も記述の豊富な版でもある。

II 江戸東京の名所分布と行政区画

近代東京の行政史を振り返ると、いくつかの画期がある。ひとつは、明治期における行政の整備である。最初は三新法の制定により、東京府15区6郡が成立した。次に1889（明治22）年、市制・町村制の施行により、東京市15区が誕生した（図1）。その後、1893（明治26）年には、多摩3郡（北多摩郡・南多摩郡・西多摩郡）を神奈川県から東

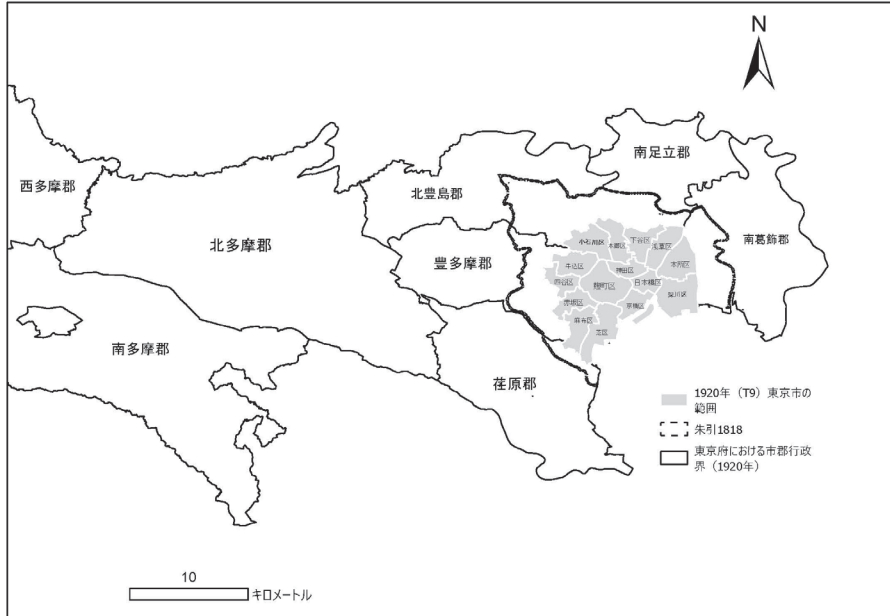


図1 1920年における東京府の行政区画と江戸の朱引

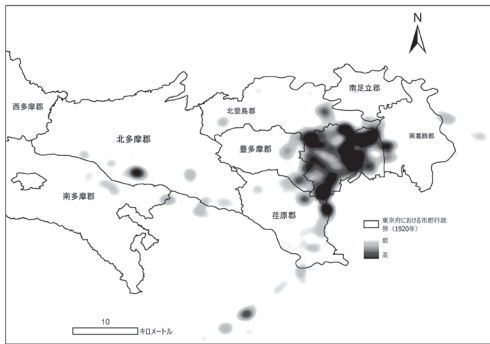


図2 『江戸名所図会』の名所分布

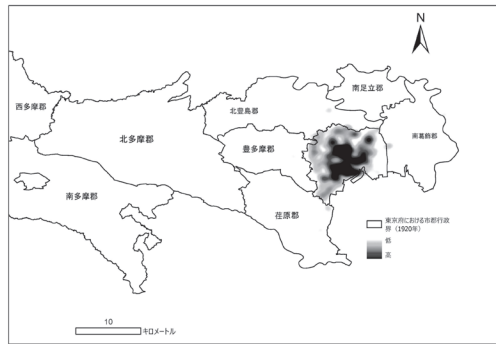


図4 『東京遊覧案内』の名所分布

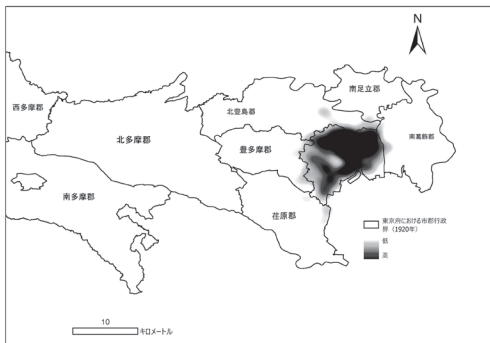


図3 『新撰東京名所図会』『東京近郊名所図会』の名所分布

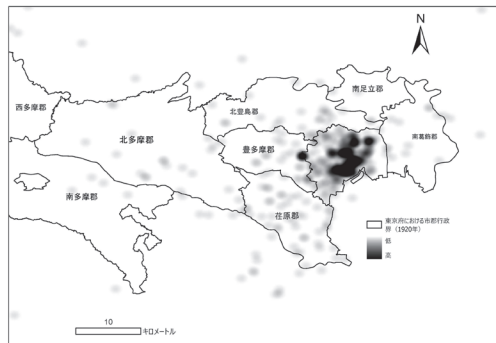


図5 『大東京案内』の名所分布

各史料より筆者作成

京府に移管した。これら一連の行政改革により、近代東京府の原型ができあがったといえる（櫻井2017）。

次に、1932（昭和7）年には、東京市に府下5郡（荏原郡、豊多摩郡、北豊島郡、南足立郡、南葛飾郡）を編入し、東京市35区（通称「大東京」）としたことである。これが現在の東京都23区の前身である（白石2017）。『大東京案内』によれば、ニューヨーク市の人口693万人に次いで東京市は584.9万人となり、世界第2位の大都市となった。1943（昭和18）年には、東京市は廃止され、郡部と一体となった東京都が誕生した。あくまで戦時下の地方制度見直しの一環であったものの、市と府の二重行政が簡素化されたことは評価できよう（櫻井2017）。この行政区画は、戦後日本に引き継がれ、東京都の原型となる。

表1にある4つの史料から、各時代における名所分布の広がりを見るうえで重要なことは、東京市15区の境界である。江戸の「朱引」の範囲と比較すると、東京市の範囲のほうがかなり狭いことがわかる（図1）。1868（明治元）年に東京府が設置されると、その範囲は、基本的には江戸の朱引地と周辺の代官支配地を引き継いだ。その後、東京府は、明治2（1869）年に改めて朱引を引き直し、朱引内外を再区画した（櫻井2017）。それが図1中にある東京府15区の範囲となり、1878年以降、東京市15区の範囲に引き継がれた。

東京府の市郡行政区画（1920（大正9）年）の地図上に、各時代の名所分布を重ねて比較する（図2～図5）。その際、それぞれの名所図会・案内本にある名所や観光施設、挿絵や写真などから、場所が特定できるものをプロットし、ArcGISProの機能にあるヒートマップで示した分布図を作成した。大量にある名所を、ヒートマップで表現することにより分布密度を把握し、最も密度が高い地域を視覚的に判断することができる。そのため、名所分布の広がりだけでなく粗密を把握することが可能になる。

図2は、『江戸名所図会』に記載された名所の分布を示した。本書のタイトルにあるように、ま

さに「江戸」の名所を網羅した図会であるが、東京市の範囲およびその周辺（かつての江戸の朱引内）だけでなく、多摩地域および現在の神奈川県や千葉県の領域まで、広範囲に名所分布密度の濃い地域が広がっている。

一方、『新撰東京名所図会』『東京近郊名所図会』にみる名所分布（図3）を見ると、東京市の市域内に極めて高密度に名所が集中しており、明治期および大正期の東京名所の多くが東京市の範囲内にあることがわかる。

『新撰東京名所図会』や『東京近郊名所図会』は、前述のように、その編纂方針として『江戸名所図会』を前提としたものであったため、多くの『江戸名所図会』の挿絵も東京名所とともに挿入されている。しかし、このように、名所分布の粗密や広がりを確認してみると、江戸名所図会の名所分布とはその特徴がかなり異なることが明らかになった。

次に、『東京遊覧案内』（1907）と『大東京案内』（1937）にみる名所分布を見てみよう。いずれも、東京市が編纂した小型の遊覧・観光ガイドブックであり、名所図会と比較すると、名所掲載数は少ない（表1参照）。その分、遊覧・観光目的に絞られた名所が記載されているのだろう。

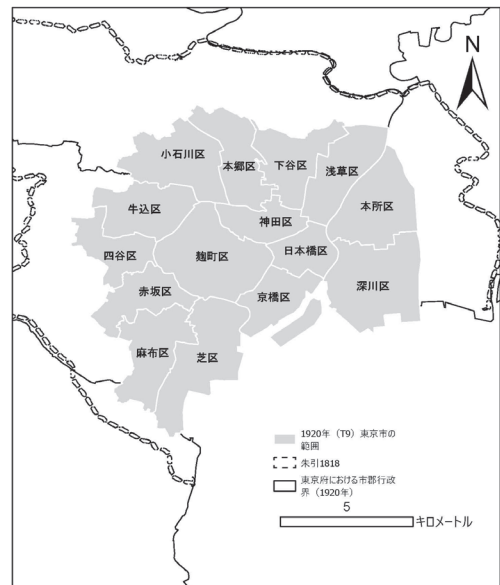


図6 1920年における東京市15区

図4の『東京遊覧案内』の名所分布の粗密を見ると、同時期の名所分布を示している図3と比較して、より東京市中心部に高密度に分布していることがわかる。東京市でいえば、麴町区、日本橋区、京橋区、芝区の北部あたりを示している(図6)。飛地的に浅草区も名所分布の密度が高い。さらに『大東京案内』の名所分布(図5)では、東京市中心部の同様の地域のなかでも、より狭い範囲に名所が集中している。また、東京市15区の範囲を超えて、東京府全体や神奈川県や千葉県など東京周辺まで、名所分布が広がっていることもわかる。これは、明治期と比較して、昭和期では、より広範囲に「東京」(必ずしも東京府の範囲内ではない)名所が立地する地域が、東京市や東京府の範囲を超えて分散するようになったことを示す。

以上、記載された名所の分布数および分布の粗密や広がりの特徴から、それぞれの史料の取り扱う名所分布の違いを検討した。その結果、名所図会は、江戸も東京も、いずれも扱う名所数が多く、網羅的であり、名所知識重視の記述選定であることがうかがえる。一方、案内本では、遊覧・観光

目的のための編纂であるゆえに、名所の総数は少なくなるものの、東京市の特定の地域に集中して名所を選定しており、より名所分布の密度が高い場所があることが明らかになった。

Ⅲ 坂・橋の名所分布と山の手・下町

前章において、名所図会に掲載された名所は、遊覧・観光目的というよりは、知識重視の名所選定であることを述べた。その観点から、人々が認識する東京名所、つまり「東京らしさ」を象徴する名所が数多く取り上げられていることと考えられる。そこで、東京の地域性を捉えるうえで重要な「山の手」と「下町」の特徴をおさえたうえで、名所図会に記載された東京の名所分布と「山の手」・「下町」の関係を考察する。

陣内秀信によれば、東京は、「自然や地形の条件を活かして巧妙につくられた個性ある景観構造」をもっており、とりわけ山の手は、台地と谷地が入り組んだ複合的な地形で成り立っているとされる。また、山の手では、どの地区を見ても、都市の骨格をなす道は「尾根系」と「谷系」の二重構造をなしており、その両者を結ぶ場所には、多くの坂があることを指摘している(陣内1985)。

そこで、『新撰東京名所図会』『東京近郊名所図会』に挙げられている坂の名所を確認してみよう(図7)。全部で176か所を数える。その分布傾向をみると、もちろん山の手に分布しているものの、まさに山の手「尾根系」と「谷系」の間に数多く存在することがわかる。主要道路には路面電車はあるが、狭い坂道は徒歩で移動していたであろう。急峻な坂道に名前をつけて認識することは、人々の生活の知恵でもある。明治東京の人々にとって、坂は、生活に根差した身近に体感できる名所だった。一方、道幅が拡張され、コンクリートで舗装された現代東京の坂は、自動車で移動しているだけでは何の苦労もない。

ところで、東京の地域性は、台地と谷地が織りなす「山の手」だけでなく、河川と掘割を軸にして成り立つ「下町」でも語られる。かつての東京

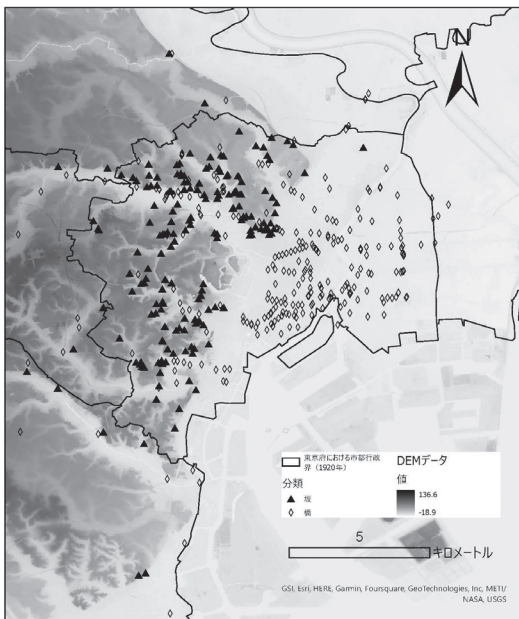


図7 坂・橋の名所分布

(『新撰東京名所図会』『東京近郊名所図会』より筆者作成)

はイタリアのヴェネツィアに似た「水都」であり、江戸を受け継いだ明治の東京には、多くの川や運河があった（陣内 2020）。そして、昭和の時代まで東京の水運は活発だったものの、その後、衰退した。現代では、水辺空間の復活の取り組みも始まっている。

かつての東京の水辺空間には名所も多かった。神社や寺院はもちろん、堤や橋も人々にとっては名所である。明治期の東京には、多くの小さな橋が架けられ、それらも東京名所であった。同様に、『新撰東京名所図会』『東京近郊名所図会』から橋の名所を確認すると 282 か所も存在した（図 7）。その名所分布を見ると、下町の低地部分だけでなく、山の手にも確認できる。これらの橋も、東京の人々にとって、重要な名所であったと推察できよう。このように、名所図会には大小多くの坂と橋が名所として記載されていることが明らかになった。そして、これらの小さな多くの坂や橋の名所は、訪れるべき観光名所というよりは、人々が身近な存在として認識する名所であり、「東京らしさ」を体現する場所でもあった。

それを裏付けるように、『新撰東京名所図会』と同時期に遊覧目的で編纂された『東京遊覧案内』における坂の名所は、紀尾井坂と神楽坂の 2 か所のみである。橋の名所も、二重橋、日本橋、常盤橋、江戸橋、京橋、昌平橋、海運橋、両国橋、厩橋、吾妻橋、永代橋、新大橋であり、皇居や日本橋周辺、隅田川の架橋など市内 12 か所が挙げられているのみである。

さらに『大東京案内』になると、坂としての名所記載は消失する。一方、橋の名所は、震災復興事業による十大橋に新大橋と千住大橋を加えた「隅田川十二大橋」が写真付きで掲載されている。とりわけ、清州橋と永代橋については、その壮麗さを讃えており、東京の名所としての注目度は高い。その際、「隅田川を巡行している汽船を利用してこれら隅田の諸橋を見物するのも亦興味があろう」と、実際に橋を見物することを勧めている。

このように、坂や橋を名所として捉える人々の眼差しには、江戸以来の地形や自然に根差した「東

京らしさ」を表現する名所から、近代的でモダンな名所、そして実際に見物すべき名所としての変化を見ることができる。そして、現代において東京を訪れる人々が、隅田川クルーズに乗船し、隅田川架橋の美観を見物して楽しむ名所体験の原型が、昭和戦前期には出来上がっていた。

Ⅳ 「大東京」の名所分布と交通網

(1) 案内本と東京名所見物

江戸名所から東京名所への変化を考える際に、交通の近代化は重要である。図 2 から図 5 に至る名所分布の差異は、人々の交通手段が、徒歩移動から路面鉄道や近郊鉄道、地下鉄道、乗合自動車等に変化したことも重要な要因のひとつである。特に、路面鉄道（東京市営電車）は、江戸以来の市内の重要道路上に建設されたため、まさに東京の人々の足となった。

東京市内の電車網は、1903（明治 36）年に東京電車鉄道、東京市街鉄道、東京電気鉄道の 3 社が本格的に展開した。1906（明治 39）年に 3 社は合併して東京鉄道になった。1911（明治 44）年には東京市が東京鉄道を買収し、東京市営電車（通称市電）となる。

1907（明治 40）年刊行の『東京遊覧案内』には、「賃銭は五銭均一」「往復は九銭」とあり、東京鉄道線として、品川上野浅草線、三田線、新宿線、深川線、市谷線、青山線、江戸川線、外濠線、信濃町広尾線の各停車場が記載されている。名所については、東京市 15 区別に列挙されているのみ、どのような路面電車網を利用して各名所をめぐるのか、の記載はない。そのため、各名所と交通網の関係は、東京の地理に詳しくない読者には把握できない。しかし、1937（昭和 12）年の『大東京案内』になると、案内本の最初の頁には、東京市主要部の電車網の地図が掲載されており、最後の頁にも、近郊遊覧地案内が掲載されている。そのため、東京の地理に詳しくない読者にも、一目で目的地の位置や路線がわかる。

本文中にも、市電、鉄道省線電車、地下鉄道、

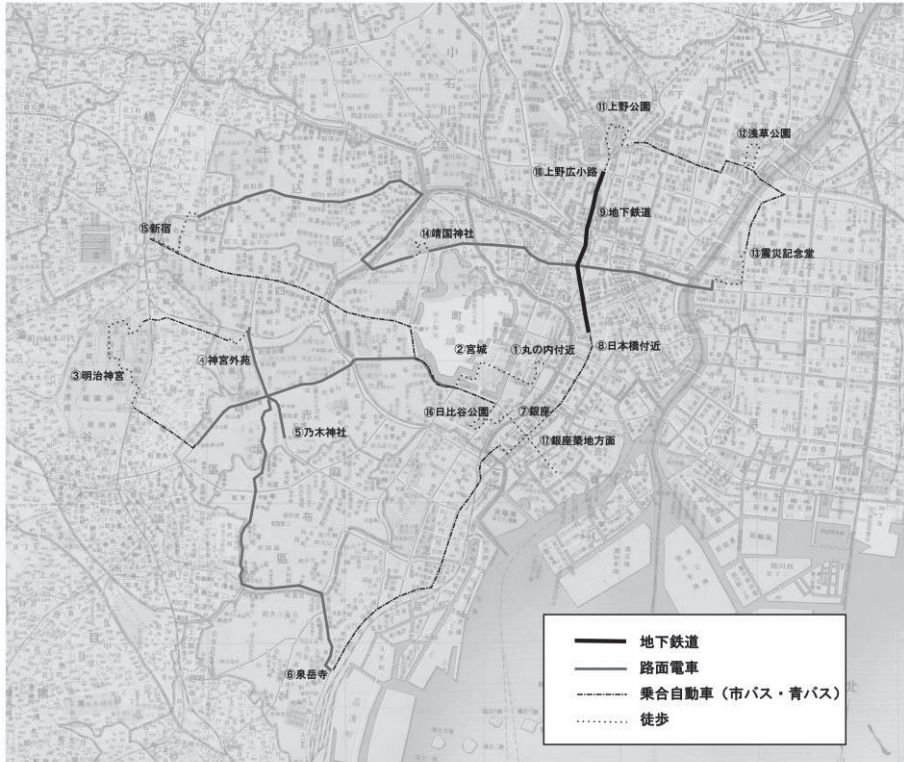


図8 1日東京見物のルート（『大東京案内』より筆者作成）
ベースマップ：『新東京明細地図』昭和10年版（文彰堂発行）EToS所蔵

乗合自動車，円タク（タクシーのこと），航空輸送と遊覧飛行，私鉄（郊外電車沿線の名所として後述）の説明もある。市電については、「東京に於ける最も重要な最も便利な交通機関」であり，1日の乗客は100万人を超えるという。旧市域（東京市15区）だけでなく，新市域（東京市35区）の一部にも延伸し，早朝（夏は午前4時半，冬は午前5時半）から夜間まで頻繁に運行する。片道7銭，往復14銭，9回・15回・45回の回数券もある。市営の乗合自動車（市バス）への乗り換えは，3銭を追加される。

『大東京案内』には、「大東京には名所が餘にも多い」とあり，短い日数で適格かつ経済的に東京の良い所をなるべく多く見て回れるように，東京見物（日程と順路）のモデルコースが提案されている。1日～5日までの東京見物のコースを交通手段と各交通機関の停車場やその間にある見物

すべき名所を図で解説し，6日以上の見物については文章で説明している。そこで，最も代表的なコースである「1日見物」をみてみよう（図8）。

乗り物質は合計80銭（内訳：市電25銭，乗合自動車40銭，地下鉄道5銭）である。見学エリアは，順番に①丸の内付近，②宮城，③明治神宮，④神宮外苑，⑤乃木神社，⑥泉岳寺，⑦銀座，⑧日本橋付近，⑨地下鉄道，⑩上野広小路，⑪上野公園，⑫浅草公園，⑬震災記念堂，⑭靖国神社，⑮新宿，⑯日比谷公園，⑰銀座築地方面である。

東京駅を出発し，徒歩で丸ビルや会社街，中央郵便局を見学して，馬場先門から宮城前広場に入る。二重橋を見て桜田門を通り，渋谷駅行の市電に乗車する。車窓から，警視庁・新議事堂・参謀本部などの東京を代表する近代的な建築物を眺め，三宅坂付近では江戸城内濠の水辺風景を堪能する。左手車窓に閑院宮邸が見えると，電車は赤



図9 郊外電車沿線の名所
 (『大東京案内』より筆者作成)

からである(東京都交通局2011)。そこで次節では、図5で示した東京市や東京府の範囲を超えた名所の分散傾向も、郊外交通網の発展と深く関連していると考え、その観点からさらに分析を進めていく。

(2) 郊外電車沿線の名所

『大東京案内』には、「郊外電車沿線の名所」として、省線と私鉄電車の沿線ごとに、名所の下車駅と運賃が記載されている。取り上げられている郊外電車は、省線電車、京浜電車、湘南電車、池上電車、目黒蒲田電車、東京横浜電車、玉川電車、小田原急行電車、京王電車、西武電車、武蔵野鉄道、東武電車東上線、王子電車、東武鉄道、京成電車、城東電車、帝都電車の合計17路線である。

ここで注目したいことは、省線沿線として挙げられている名所は10か所のみであるにもかかわ

らず、私鉄沿線の名所は154か所にものぼることである。図9では、1937年の省線と私鉄沿線の路線図上に郊外名所の分布を示した。省線沿線の名所は、中央線沿線に6か所と多く、その他の近郊名所は鎌倉駅、大宮駅、市川駅、赤羽駅からの4か所のみである。一方、私鉄沿線の名所は、東京市郊外の東西南北の各方向、かなり広範囲に分布している。

ところで、私鉄沿線名所の分布を地図上に落としてみると、省線の路線と重なっている地域も多い。多摩地方だけでなく、日光や成田、箱根や鎌倉・江ノ島など、私鉄だけでなく、省線による移動も可能なはずである。ただし、東京市が発行する『大東京案内』の「郊外電車沿線の名所」には、ほとんどの著名な郊外名所が、私鉄沿線の名所として紹介されている点は興味深い。

さらに『大東京案内』には、東京の見物を一通

り終了した人々のために「東京から日帰りの旅」も挙げられている。東京付近の遊覧地として、多摩御陵と高尾山、日光、箱根、成田山、鎌倉と江ノ島、熱海と伊豆山温泉、三浦半島、秩父長瀬、天覧山（羅漢山）、奥多摩溪谷、筑波山、大島、村山貯水池と山口貯水池を風景写真と共に紹介する。東京から日帰りでは難しい場所もいくつかあると想像するが、「東京の附近には、海に山に或いは温泉に、日帰りの出来る遊覧地が沢山ある」とされている。

ここで、先ほど指摘した省線と私鉄による名所へのアクセス競争についてみてみよう。日光は、「世界の日光」「あらゆる美と魅力を兼ね備える」とまで表現され、東京から日帰りできる名所として、日本人だけでなく外国人の観光客にも注目度の高い場所である。省線にかかる時間と運賃は、上野駅と日光駅間で3時間15分（普通）、2時間25分（季節特急）、片道2円13銭、往復3円50銭とある。東武鉄道では、雷門駅から東武日光駅まで2時間44分（普通）、2時間18分（特急）、片道2円13銭、往復3円20銭とある。私鉄である東武鉄道のほうが、所用時間も運賃も若干短くて安価である。

東武鉄道の日光までの開業は1929（昭和4）年だった。開業後のわずか3週間後に世界大恐慌になり、日本も不景気となるが、東武日光線で日光を訪れる人々は増加の一途をたどり、東武鉄道は鉄道省に大きく優位にたった。しかし、鉄道省も、翌年には上野と日光直通の特急を走らせ、両者の競争は戦後まで続いたという（今尾2015）。

日本の大都市私鉄（電鉄）は、大都市のターミナル駅を起点に郊外へと路線網を拡大し、住宅地、商業施設、行楽地、教育施設に至るまで沿線の空間や生活文化に大きな影響を及ぼしてきた。江戸以来の社寺参詣、名所めぐりにも私鉄は大きく関わってきた（鈴木2019）。京浜電車は、品川駅を出発し、穴守稲荷を通過して、花月園、川崎大師へと到着する。もともと京浜電気鉄道は、1898（明治31）年に大師電気鉄道として、江戸以来の東京近郊の名所である川崎大師の参詣のために設立さ

れた会社である。1941（昭和16）年には、湘南電車と合併し、三浦半島の名所めぐりも京浜電車が担うようになる。

以上、東京市内および東京郊外における人々の名所体験は、近代交通網の整備とその発展に伴い、より高密度に、そしてより広範囲に展開していくことが明らかになった。

おわりに

本稿では、江戸東京の名所図会と案内本に記載された名所とその分布傾向を比較し、各史料の違いを明確にした。そのうえで、近代東京における行政区画、山の手と下町という地形的特徴、近代交通網の整備・発展という三つの観点から、人々の名所体験と近代東京の地域性との関係を論じた。

かつて、名所はテキストなどを通して人々が認識する名所だった。江戸時代後半から、それらの名所は、実際に人々が体験する名所へと変化した。近代東京になると、それは顕著になる。人々の名所体験に、東京の地域性は大きな影響を及ぼした。

「朱引」で区切られていた江戸の範囲は、東京市15区となり、その空間的範囲は縮小した。名所も各区単位で把握された。江戸名所は朱引外にも広がっていたが、東京名所の数多くは市内に密集した。人々の名所体験は、東京の市域内が中心となった。

山の手や下町に広がる、東京を特徴づける地形的特徴と人々の名所認識には深い関係がある。坂や橋は、東京の人々にとって、江戸から続く名所であり、日常的な生活のなかで体験できる名所だった。しかし、名所が遊覧中心のものとなるにしたいが、坂の名所は消滅し、橋の名所は巨大な近代橋梁のみとなった。

復興事業が完成して「大東京」になると、交通手段は多様化し、市域内や郊外の交通網は発展した。路面電車、バス、地下鉄、そして東京と郊外をつなぐ様々な電鉄が、人々の名所見物を押し進めた。近代的な交通インフラ整備は、モダンな風

景としての名所という意味だけでなく、人々の名所体験も多様化させた。

本稿では、あくまで名所図会・案内本の記述をもとに、人々の名所体験を論じることを目的とした。近代東京における名所体験をより詳細に明らかにするためには、絵葉書、写真などの名所風景、見聞記や旅行記といった個人の記録などから、より具体的な東京の名所体験を考察していく必要がある。今後の課題としたい。

(付記)

本稿は、法政大学江戸東京研究センター「江戸東京アトラス」プロジェクトの成果の一部である。本稿で利用したデータは、2019～2021年度の人文地理学演習(5)の3年生受講生のグループワークおよび歴史地理学研究Ⅰ・Ⅱの受講生による作業の一部である。案内本の分析には、鈴木康太郎「近代東京における名所の変遷と名所認識の変化」(2021年度文学部地理学科卒業論文)におけるデータの一部を利用した。卒論データを提供していただいた鈴木氏に感謝いたします。

参考文献

- 阿部美香(2018)『歌川広重の声を聴く』京都大学学術出版会
- 市古夏生・鈴木健一(1997)「『江戸名所図会』えを読むために」『江戸名所図会事典』ちくま学芸文庫
- 今尾恵介(2015)『地図と鉄道省文書で読む私鉄の歩み—京王・西武・東武』白水社
- 馬木知子(2004)「名所本にみる近代東京の都市風景の変容について」ランドスケープ研究 67-5
- 大宮直記・下村彰男・熊谷洋一(1995)「名所図会・百景にみる近代以降の東京における「景」の変遷に関する研究」ランドスケープ研究 58-4
- 金子晃之(1995)「近世後期における江戸行楽地の地域的特色—『江戸名所図会』からみた行動文化—」歴史地理学 175
- 小林ふみ子(2022)「地誌と絵本挿絵のなかの江戸」ローザ・カーロリ・小林ふみ子・陣内秀信・高村雅彦監修・法政大学江戸東京研究センター編『水都としての東京とヴェネツィア—過去の記憶と未来への展望』
- 米家志乃布(2020)「近代の名所図会にみる江戸イメージ」法政地理 52
- 米家志乃布(2022)「名所図会の挿絵・写真にみる『旧観』江戸と『新景』東京」法政地理 54

- 米家志乃布(2023)「名所と視覚的経験—江戸東京の風景」法政大学江戸東京研究センター編『新・江戸東京研究の世界』法政大学出版局
- 齊藤智美(2013)『江戸名所図会の研究』東京堂出版
- 櫻井良樹(2017)「東京府の誕生」池亨・櫻井良樹・陣内秀信・西木浩一・吉田伸之編『みる・よむ・あるく東京の歴史通史編3』吉川弘文館
- 陣内秀信(1985)『東京の空間人類学』筑摩書房
- 陣内秀信(2020)『水都東京—地形と歴史で読み解く下町・山の手・郊外』ちくま新書
- 白石弘之(2017)「都市の拡大」池亨・櫻井良樹・陣内秀信・西木浩一・吉田伸之編『みる・よむ・あるく東京の歴史通史編3』吉川弘文館
- 鈴木章生(2001)『江戸の名所と都市文化』吉川弘文館
- 鈴木勇一郎(2019)『電鉄は聖地をめざす—都市と鉄道の日本近代史』講談社選書メチエ
- 高槻幸枝(2004)「ガイドブックに見る「名所」の変遷—1830年代の江戸から2000年の東京まで—」お茶の水地理 44
- 千葉正樹(2001)『江戸名所図会の世界—近世巨大都市の自画像』吉川弘文館
- 塚本章宏(2006)「近世京都の名所案内記に描かれた場の空間的分布とその歴史の変遷」GIS理論と応用 14-2
- 東京都交通局編(2011)『都営交通100年のあゆみ』東京都交通局
- 並木誠士(2011)「名所を描く—江戸時代までの展開」『美の風景—天橋立と名所絵屏風の世界』京都府立丹後郷土資料館
- 長谷川奨悟(2010)「『都名所図会』にみる18世紀京都の名所空間とその表象」人文地理 62-4
- 羽生冬佳・岡野祥一(2003)「江戸の伝統的名所の特性と明治以降戦前までの名所としての価値の変遷に関する研究」ランドスケープ研究 66-5
- 羽生冬佳(2005)「明治以降戦前までの東京の名所の成立・変遷に関する研究」ランドスケープ研究 68-5
- 森田善紀・羽生冬佳・十代田朗(2003)「明治以降戦前までの東京案内本の記載情報の変遷—旧東京市15区6郡を対象として」観光研究 15-1

Experiences of Famous Places in Modern Tokyo: An Analysis of Illustrated Famous Places and Guidebooks

KOMEIE, Shinobu

Abstract

This study aimed to compare the famous places mentioned in the representative *Meisho Zue* (illustrated books about famous places) and guidebooks of Tokyo as well as their distribution trends, clarify the differences between historical sources, and discuss people's experiences of famous places in modern Tokyo.

This study analyzed and discussed the relationship between people's experiences of famous places in Tokyo and the regional characteristics of Tokyo from three perspectives: (1) Tokyo's administrative divisions, (2) topographical characteristics of the *Yamanote* (Tokyo's upper areas) and *Shitamachi* (Tokyo's downtown areas), and (3) the development and improvement of the modern transportation network.

The results show that people's experiences of famous places in modern Tokyo developed more deeply through the Meiji, Taisho, and Showa periods. Moreover, they diversified not only in terms of the modernization of the sceneries of famous places but also as experiences of famous places.

Keywords : experiences of famous places, illustrated book of famous places, guide books, locality, modern Tokyo